

Title	『永久百首』とその背景
Sub Title	
Author	伊倉, 史人(Ikura, Fumito)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1998
Jtitle	三田國文 No.27 (1998. 3) ,p.11- 23
JaLC DOI	10.14991/002.19980300-0011
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19980300-0011

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『永久百首』とその背景

伊倉 史人

はじめに

『永久四年百首和歌』は、藤原仲実を企画・勸進者として中宮篤子に関係の深い六人の歌人が集まり、堀河天皇、中宮の相次ぐ崩御を追悼するという私的な目的で成立したといわれている。橋本不美男氏はこの『永久百首』について、『堀河百首』が「みづみづしい創作創造意欲に燃えての、宮廷と歌壇との表舞台に対する意欲の表示」であるのに対して、「いはば堀河院歌壇の残映をわづかに示し、盛時への懐旧がその主体となっている」との評価を下している。確かに、規模の面、あるいは参加歌人の顔触れからすれば「残映」との評価もある程度正当なものであると言わざるを得ないだろう。

とは言うものの『永久百首』は、和歌史の上で見れば、周知のように『六百番歌合』では『永久百首』の二五の歌題が採用されているし、また、為忠家の両度百首へ、歌題設定あるいは詠作の面で影響を与えているなどの指摘もあり、後代の百首に少なからず影響を与えていることも確かである。

しかしながら、その成立に関しては史料的に探れることには

限界があり、諸伝本の端作が「永久四年十二月二十日」と成立年次と思しきものを伝えるのみで、その多くは依然として解明されていない。

そこで、本稿では従来あまり積極的には論じられることなかった和歌そのものの検討を行い、そして、その結果から『永久百首』の成立に関して少しく気がついたことを述べてみたいと思う。

一

『永久百首』を題毎に読み進めていくと、歌枕（ここでは和歌に詠まれた地名の謂いで用いる）が数多く詠み込まれていることに気がつく。中には歌枕と認定すべきかどうか判断しかねるものもあり、正確な数字を出すことはできないが、重出するものを除いても、その数は一五〇を越える。この数字は『永久百首』全体のおよそ二五％にあたり、同百首を考察していく上で歌枕詠は重要な位置を占めると思われる。例えば「池」題の歌には、

汀にはたちもよられぬ山がつのかげはづかしき清住の池

(五四一・顕仲)

冬さむみにほ鳥すだく原の池も世にむすほほる氷しにけり
(五四二・仲実)

世にわびて波たちまちにすくなれどあその御池にぬさたて
まつる (五四三・俊頼)

いせならばびがごとすとやおもはまし山となるてふみまさ
かの池 (五四四・忠房)

すべらぎのながるの池に水すみてのどかにちよのかげぞ見
えける (五四六・常陸)

酌みてしるひともあらしなおもふこといはれの池のいひし
出でねば (五四七・大進)

というように、兼昌を除く六人の歌人が有名、無名なものを取
り混ぜ各々異なつた歌枕の池を詠み込んでいる。^③

また、「出湯」題の歌には「島根の御湯」をはじめとして、
「ましらの浜の走湯」「み熊野の湯」「有馬の山に出る湯」

「有馬の山の塩湯」「七栗の湯」というように七首中六種類
——「有馬の山に出る湯」と「有馬の山の塩湯」は同じである

と考えれば五種——の異なる出湯を見ることができ。このよ
うに、同一題において複数の歌人が複数の異なる歌枕を詠み入
れる傾向が、更にこの他いくつかの題においても同様に見受け
られる。左にその歌題と歌枕のみを掲出しておく。

水海 近江瀉・美保岬・えがたの浦・近江海・打出浜・

にほの海

原 奥津が原・青柳の原・真野の萩原・もろこしの原・

朝の原・生の松原

社 出雲・七の御社・三輪社・布留社

ここで先行する「堀河百首」に目を向けてみると、やはり同
様の傾向が見られることに気がつく。たとえば「橋」題を見る
と、「板倉橋」「瀬田長橋」「浜名橋」「佐野船橋」「真野懸橋」

「をばただの板田の沼に渡す橋」「板打の橋」をばただの板田
の橋」「宇治橋」「古野の沢に渡す橋」「八橋」「木曾路橋」「み
ちのくの朽木の橋」というように多くの歌枕の橋が詠み込まれ
ている。以下歌枕を列挙することはしないが、「橋」題の他に

も「山」「河」「野」「関」「海路」等の題についても同じような
傾向が見受けられる。このことについて、橋本不美男、滝沢貞
夫氏は「粟堀河院御時百首和歌とその研究」(昭和五年三月・

笠間書院、以下「校本堀河百首」)の中で、

「駒迎」「河」「関」「橋」「野」「山」「海路」等の歌題は、
歌枕をむしろ詠み入れる方向で設定した歌題であるように
思われる。(本文研究篇、三七二頁)

というように推測している。この推測はそのまま「永久百首」
の場合にも当てはまるだろうか。

先に列挙した「永久百首」の各題に詠まれた歌枕には初出の
もの、あるいは既に詠まれてはいるものの顧みられることのな
かったものも多い。例えば、「池」題に詠まれた「清住の池」

(五四一・顕仲)(未詳。現奈良県高槻町大和郡山市の旧東大
寺領清濟庄にあつたか)は、

……我為時乎 相有君乎 莫等 母寸巨勢友 吾情
清隅之池之 池底 吾者不忍 正相左右(13・三三〇三)

という「万葉集」の長歌にのみ見えるもので、これを証歌とす

ると考えられる。頭仲の歌以外には用例はなく、彼が『万葉集』の中から発掘してきた歌枕といえよう。

また、「原」題では「青柳の原」（五二八・仲実）が詠まれているが、これも次の『万葉集』（一四・三五六八）を典拠とすると思われる。

安^{アヲ}楊^{ヤギノ}木^キ能^ノ 波^ハ良^ラ路^ロ可^カ波^ハ刀^ト尔^ニ 奈^ナ乎^ハ麻^マ都^{ツト}等^ト 西^セ美^ミ度^ド波^ハ久^ク末^マ
受^{ウケ} 多^タ知^チ度^ド奈^ナ良^ラ須^ス母^メ

但し、この「青柳の原」は本来は歌枕ではなく、右の歌の二句目までは「青柳の萌らる川門に」と訓むのが正しい。「萌らる」とは「張れる（芽吹いている）」の上代東国方言であつたといわれるが、当時の歌人達には理解できなかったのであろうか。

「青柳の原」は訓点上の誤りが生み出した架空の歌枕である。

こうした新たな歌枕の発掘あるいは創出の試みから判断して、先に挙げた歌題に関しては積極敵に歌枕を詠み入れようとする歌人達の姿勢を見てとつてもよいのではないだろうか。問題は、設題者が歌枕を詠む方向で歌題を設定したとしても、その意図が歌人達に事前に伝えられていたのか、あるいはそうした事前の意思統一はなく各々が歌題から判断して自主的に（したがって偶然に）歌枕を詠んだのかということだ。そこで、次の例を見てみよう。「不見書恋」題には、

おほつかなきそぢのはしは年ふれどかけてぞ我はふみみぎ
りける（四五七・頭仲）

かつらぎやくめの岩はしふみみねどわたりがたしとそらに
しりつつ（四五八・仲実）

いさや又ふみもみられずともすればとだえのはしのうしろ

めたさを（四五九・俊頼）

いかがせむさのふなばしさのみやはふみだにみじと人の

いふべき（四六〇・忠房）

わざもこがあふみなりせばざりと我ふみもみてましとどろ

きはし（四六一・兼昌）

あふことのたえがちにもなりゆくかふみだにかよへまの

のつきはし（四六二・常陸）

というように、大進を除く六人の歌人が共通して、歌題の「不見書（文見ず）」を「踏みみず」と掛けて詠む手法が用いられている。この手法は、既に平安中期頃から現れはじめ、また好んで用いられたらしく多くの作例を残している。たとえば、

『後拾遺集』（恋一・六二七）には、

かへりごとせぬ人に、山てらにまかりてつかはしける

道命法師

おもひわびぎのふ山べにいりしかどふみみぬみちはゆかれ

ざりけり

というような歌が見え、また、小式部内侍の有名な、

おほえやまいくののみちのとほければふみもまだみずあま

のはしだて

という歌は「俊頼髓脳」（四三九）にも引用され、後に『金葉集』（雑上・五五〇）にも入集するなど、『永久百首』歌人にとつ

ても馴染みのある手法であつたといえよう。しかし、ここで注目すべきは、『永久百首』の六首はすべて「踏みみぬ」対象を歌枕の橋としている点だ。もちろん同じ趣向で歌枕の橋を詠んだ先行例はあるが、歌題の「不見書恋」だけを考えれば場合橋を

詠み入れなければならぬということはない。六人の歌人が偶然に同じ趣向を用い、しかも歌枕の橋を詠んだとは考えにくいのではないだろうか。

以上の例から判断して、『永久百首』の詠進に際しては、事前にある程度歌題に関して詠むべき方向性が歌人達の間にコンセンサスとして広まっていたと推測する。

二

次に、歌枕から離れて歌語に注目して『永久百首』の歌を検討していくことにする。まず、『躑躅』題から次の四首を挙げる。

しづのをがかりてはやせるをかつつじわか枝に花のさきに
けるかな(九九・顕仲)

紅のふりでの色のをかつつじいもがま袖にあやまたれける
(一〇〇・仲実)

入日さすをちのをかべのをかつつじ夕くれなるに色ぞまさ
れる(一〇三・兼昌)

をかつつじをりてをゆかん花の色のあかきぞたのみ日はく
れぬとも(一〇五・大進)

右の四首には「をかつつじ」が詠まれている。「をかつつじ」は『八雲御抄』に「躑躅 白。もち。いは。を。か。……」と見え、これによれば『万葉集』を出典とする歌語であると思われるが、現存する『万葉集』には該当するような歌は見つからない。躑躅は『古今集』に一首「いはつつじ」が恋の部(恋一・四九五)に詠まれ、また『古今六帖』にも「つつじ」と「いはつつじ」の分類項目が見える。更に『和漢朗詠集』に「躑躅」

題、『後拾遺集』に歌群(夏・一五〇～一五二)が見られるが、詠まれているのはみな「いはつつじ」である。唯一『永久百首』に先行して見いだせる「をかつつじ」の用例は、永承三年(一〇四八)春に催された「鷹司殿倫子百和香歌合」での、

ふりはえて折りに来たれば高麗錦くれなる深きをかつつじ
かな

という相模の一首のみである(但し、歌題が「岩躑躅」である点が不審)。右の四首は何に依拠したのか確かではないが、それまでほとんど詠まれることのなかった「をかつつじ」を一度に四人の歌人が採用したということは、偶然の一致と片付けるには躊躇せざるを得ない。

また、同じ「躑躅」題の残りの歌には、

百たへぬやすすみ坂のしらつつじしらじな人はみにこぞる
とも(一〇一・俊頼)

風ふかでのなみのおるやとみるまでにいそつづきさくしらつ
つじかな(一〇二・忠房)

というように、「しらつつじ」が詠み込まれている。この「しらつつじ」は、『万葉集』に三例見いだすことができる(3・四三七/9・一六九八/10・一九〇九)。うち一六九四番の歌は『古今六帖』に、一九〇五番歌は『赤人集』(一八八)にも入集している。やはり万葉歌以来、その用例は絶えて無いのであるが、俊頼にはもう一首、詠歌時期は不明なものの『夫木抄』(二二〇二・「家集」^{良七})に、

初瀬川きしの岩ねの白つつじしらじな人は身にこふるとも
という『永久百首』詠に類似する歌が見える。また『綺語抄』

にも『万葉集』の四三七番歌が採録されているので、忠房が「しらつつじ」を詠んだ背景に俊頼や仲実からの知識の吸収を想定することは可能であろう。

次に「鈴虫」題の歌を見てみることにする。

すずむしの声をすずかと聞かからに草とるたかぞ思ひしらす
る(三二三・顕仲)

みかり野になくすず虫をはしたかの草とりて行く音かとぞ
まく(三二七・兼昌)

この両首には「くさとるたか」という表現が共通して使われているが、顕昭の『散木集注』は「草取とは草中にて雉をとるを云ふなり。そらとるとは空にてとるをいふなり。」と説明する。後者の「そらとるたか」という表現は『堀河百首』の「鷹狩」題に次の一首を見ることが出来る。

御狩する野中のこひのしげければ空とる鷹のたがへりもせ
ず(一二五八・匡房)

また「江帥集」にも「そらとるたか」を詠んだ例(五一二)があり、匡房によつて和歌に導入された歌語であるかもしれない。

「永久百首」でも「野行幸」題で三首に用いられている。

一方、問題の「くさとるたか」も、永久三年(一一一五)の「内大臣家歌合」に「鷹狩」題で一首(九)詠まれ、また先後関係は明らかにできないが、先に引用した『散木集注』に被注される俊頼詠(『散木奇歌集』・六一四・「皇后宮亮顕国の君の家にて鷹狩の心をよめる」)も見つけることができる。しかし、先の「永久百首」の両詠には単に流行語の撰取として片付けられない点がある。それは先行する「くさとるたか」の用例

がすべて「鷹狩」題で詠まれているのに対し、『永久百首』では一見何の関係もない「鈴虫」題で詠まれている点である。鷹狩の際には鷹の尾に「鈴」をつけるというが、これはその「鈴」によせて「鈴虫」題に「くさとるたか」を詠むというひねった発想が基にある。こうした発想を二人の歌人が同時にするということは、とても偶然とは思えない。やはり、両首の間には影響関係があると見るのが自然であろう。

また「妓女」題の次の二首の歌には「はなのすがた」という語が詠まれている。

絵にかくと筆もおよばじ乙女子が花のすがたを誰にみせま
し(六四〇・仲実)

をみなへしめでたき花のすがたかな衣通姫もかくやありけ
ん(六四三・兼昌)

これは兼昌詠を見れば明らかのように、『古今集』(雑体・一〇一八)に見える、

秋ざりのはれてくもればをみなへし花のすがたぞ見えがく
れする

という歌に典を求められる。「永久百首」以前にも既にこの語を撰取した歌は散見されるし、『堀河百首』の「權」題の二首(七六〇・俊頼/七六一・師時)にも用いられている。しかしながら、女郎花がしばしば女性に喩えられることを考慮に入れても、右の『古今集』歌と「妓女」題との間には直接の結びつきは考えられず、仲実と兼昌が同時に「はなのすがた」という歌語を用いる必然性はない。やはり偶然以上の一致と考えてよいのではないだろうか。

このように珍しい歌語、趣向を複数の歌人が同じ歌題で共通して用いている例は、他にも見ることが出来る。紙幅の都合上詳しくは別の機会に譲り、注意を要すると思われるものについては、その歌題と歌語、詠んだ歌人を次に挙げておく。

賭弓 「ともね」(仲実・俊頼 ※「柄の声といふなり」)

紅梅 「紅の初花染め」(忠房・大進)

雉 「ほほろ(ほろほろ)」(忠房・常陸)

鵜河 「あゆこ」(頭仲・俊頼)

野行幸 「そらとるたか」(仲実・忠房・兼昌)

星 「ほしをいたたく」(頭仲・仲実)

桂 「かつらををる」(仲実・俊頼・忠房・常陸)

元服 「はつもとゆひ」(仲実・常陸・大進)

更に、『永久百首』には次に挙げるような類似歌も見付けることができる。「春曙」題に見られる、

山のはよこ雲ばかりわたりつつみどりにみゆるあけぼの
の空(二六・兼昌)

あづき弓はるかにみれば山のはよこ雲わたるあけぼのの
そら(二七・常陸)

という兼昌と常陸の二首は、ともに『枕草子』の冒頭が想起され類型的な表現とも言えなくはないが、用いられている歌語の一致の具合から両者の間に影響関係を想定することも可能かと思われる。

もう一組、「残鶯」題に収められた、

中中に春くれがたのうぐひすははつねよりげにめづらしき
かな(一一六・忠房)

おそ桜にほふ梢のうぐひすははつ声よりもめづらしきかな
(一一七・兼昌)

という忠房と兼昌の二首は三句目から五句目がほぼ一致している。さて、以上見てきた通り、『永久百首』には同題において複数の歌人が同じ歌語や趣向を用いている例、また数は多くないが類似する歌が存在することが分かった。多人数による組題百首の成立を考えた場合、その百首歌に参加した歌人は、百首の題をそれぞれ詠出し、部類編纂するという過程を辿ると考えられるが、そうした点から判断して、『永久百首』の和歌が詠作から提出、編纂に至るまで、完全に個別に詠まれたとは考えがたいと言えるだろう。むしろ七人の百首の間には何かしらお互いの詠作に影響を及ぼすようなことがあったと仮定したほうが自然だと思われる。

三

『永久百首』の成立の背景に歌人達が相互に影響しあうような関係があるとしたらどのようなものであっただろうか。

ここで、ひとつ想起されることがある。それは『堀河百首』の成立の前段階において、歌人たちがお互いにその百首詠進にあつたて影響を与えたあつた「場」が存在していたということだ。この「場」については、早くは峯村文人氏により「堀河百首の内容を見ると、全参加者が協力し合い、百首作歌研究会のような会合を持ったのではないかとさえ想像されるふしもある」と「百首作歌研究会」という概念で指摘され、その後橋本不美男・滝沢貞夫の両氏や竹下豊氏、また、鳥井千佳子氏等の研究

歌を詠む際にこの万葉歌を参考にしたのは、その第二句に「春日」という題がそのまま詠まれていること、あるいは左注に「春日遅遅、鶴鸚ひばり正啼……」とあることと無関係ではないだろう。というより、万葉歌が「春日」題の設定の基にあり、そのことが、何らかのかたちで事前に歌人達に説明されていたのではないだろうか。

同じような例が「遊糸」題に見ることができ。「遊糸」題は『永久百首』以前には第三類本『人麿集』の部類にあり、「いまさらに雪ふらめやもかげろふのもゆる春べとなりしものを」という歌が見える。「遊糸」とは漢語で「陽炎」を意味する。『和漢朗詠集』にも、

野草芳菲紅錦地 遊糸繚乱碧羅天（春興・一九）
林中花錦時開落 天外遊糸或有無（春興・二三）

という二編の詩句中に「遊糸」の語が用いられている。『永久百首』の「遊糸」詠を見ると、「かげろふ」という語を詠んだ者はいなく、

うちみだれすめるみ空にあそぶいとにあまの河せの水をひ
かばや（二九・顕仲）
ひばりあがる二月の日にあそぶいとにみどりの空もまがひ
みえけり（三〇・仲実）

ささがにのくもらぬ空のいとなればあそぶ気色のたえずも
あるかな（三一・俊頼）
しづけて吹きくる風もなき空にみだれてあそぶいとぞみ
えける（三二・忠房）
空はれてあまつみそらにあそぶいとによるよるはなど見え

ぬなるらん（三三・兼昌）

はるばるとあさみどりなる大空にあそぶいとをやながめく
らさん（三四・常陸）

つれづれとのどけき空にあそぶいとをわれより外に人やみ
るらん（三五・大進）

というように、全員が「あそぶいと」という語を用いている。これは、やはり『和漢朗詠集』に見える、

かすみはれみどりのそらものどけくてあるかなきかにあそ
ぶいとゆふ（晴・四一五）

という一首の中の「遊糸」を訓読して作られたと思われる「あそぶいとゆふ」という歌語に拠っていると思われ、また、そのことから「遊糸」という歌題自体も『和漢朗詠集』が基になっていることが分かり、更に「遊糸」題設定の経緯を事前に歌人達
が知っていたと推測できよう。

また、「仏名」題を見ると、次のような歌が詠まれている。
ことの葉に三世の仏の名をかけてつくれるつみは露もとま
らじ（四〇七・顕仲）

としのうちにつもれるつみもきえぬらんみよの仏の御なを
となへて（四〇八・仲実）

人わたす三世の仏のなをきけばむかしのつみもいまやきゆ
らん（四一一・常陸）

「仏名」題は『古今六帖』の分類項目（二三三～二三四）にも
なり、『和漢朗詠集』にも題（三九三～三九六）が設けられて
いて、『古今六帖』には「としのうちにつもれるつみはかきく
らしふるしら雪と共に消えなん」いう表現のよく似た歌も見受

けられる。しかし『永久百首』の「仏名」詠で目に付くのは「三世の仏」という表現が三首に詠まれていることだ。この「三世の仏」は『永久百首』以前にも『後撰集』に「折りつればたぶさけがるたてながらみよの仏に花たてまつる」（春下・一二三）などと詠まれてはいるが、「仏名」詠では題詠ではないが『江師集』（二四九、「仏名よに」）に一首見いだせるのみである。

ところが、唯一「仏名」題を持つ歌合である治暦二（一〇六六）年の『裸子内親王家歌合』には、

あらはるる三よの仏のなをきくにつもれるつみは霜ときえ
なむ（一七・美作）

たのみみるみよの仏のなをきけばつもれるつみもあらじと
ぞ思ふ（一八・式部）

としのうちにつもれるつみをのこさじと三よの仏の名をぞ
となふる（一九・せじ）

君がよをみよのほとけに年をへて返返もいのるべきかな
（二〇・兵衛）

というように、四首中四首に「三世の仏」が詠まれている。また、これらの歌とは表現上も類似点が多く、『永久百首』の先の歌もこの歌合を参考にした可能性もあろうか。

この『裸子内親王家歌合』は二十巻本類聚歌合に収められている。二十巻本類聚歌合は仁和から大治に至る二四〇年間（八五〇—一二六）の、二〇〇度を越す歌合を類聚し、二〇巻に編纂したものであるが、その第一期の「和歌合抄」の段階の編纂事業は堀河院の意志によって企画されたと言われている。

『永久百首』の成立時点では、この編纂作業は堀河院の崩御のため中絶していたと思われるが、その資料は歌人たちの目に入る範囲にあったと思われる。同歌合が『永久百首』の歌題の選出資料となった可能性は考えられないだろうか。また、その場合そのことが歌人達に知らされていたのではないだろうか。

五

『永久百首』に類似歌が存在することは先にも例を挙げたが、百首を題毎に通覧していくと、常陸と大進の歌に、二句が一致し、句の置き所も同じである例や、特定の歌語を同じ題の歌に共通して用いている例、あるいは趣向に同様の傾向が見られる例が多いことに気がつく。たとえば、「稻妻」題において、常陸は、

さと遠み山田のいほはいなづまのひかりのもるをととも
るかな（二七九）

と詠み、一方、大進は、

夜もすがら山田のいほはいなづまのひかりをのみやともし
火にする（二八〇）

と詠んでいる。いずれの歌も、『後拾遺集』に収められている、あきのよは山だのいほはいなづまのひかりのみこそもありあかしけれ

という伊勢大輔の歌に依拠したものであろう。同じ伊勢大輔の歌に拠っている俊頼の、

目もかれずまもる山田もいなづまの光にふれてただならず
みゆ（二七六）

という歌も同題に見えるが、常陸・大進の両詠では、二句から四句目にかけて表現が一致し、単に本歌を同じくするが故の類似というよりは、もつと密な影響関係を見て取つてよいのではないだろうか。また、同様に「貢物」題における二人の例も、常陸の、

皇の民やすらげくをさむればひまなくはこぶ御調物かな
(四〇五)

大進の、

いやしきや民のいとなく道もせにつきせず運ぶ御調物かな
(四〇六)

という歌のように四句目途中の「はこぶ」以下が一致している。そして、それだけではなく、常陸の歌の「ひまなく」という表現に対し、大進の歌では同意語の「いとなく」、あるいは、「つきせず」という表現に替えられて、調貢の絶え間のない様子が描かれているというように、趣向上の類似性も指摘することもできる。

この二例のほかにも常陸と大進の両百首の間には二十を超え、る歌題で類似(想)歌を探し出すことができる。本稿末尾に列挙しておいたので参照されたい。

さて、このことに関して、竹下豊氏は、その理由を常陸と大進とが姉妹であるので、百首歌の詠進に際して協力し合つて詠んだためであると指摘している¹⁶⁾。ここで二人の歌人としての経歴を簡単に調べてみると、『永久百首』以前の歌合への出詠は、常陸が三度、大進が二度果たすのみだが、常陸は肥後の名前、『堀河百首』に三人の女流歌人の一人として参加し、百首歌は

経験済みである。また、試みに両歌人の勅撰集への入集歌数を比較してみても、大進は勅撰集入集歌がないのに対して、常陸は『金葉集』を初めとして五十首にも及ぶ入集を遂げ圧倒している。また、家集『肥後集』も残されている。以上のことから判断すると、実際の詠作の実力は常陸が優っていたと考えられ、常陸が指導的な立場に立った一方向的な協力であったと言えることができるのではないだろうか。

常陸と大進に限らず『永久百首』参加歌人は『堀河百首』にも参加した歌人と参加していない歌人とに分けることができる。百首歌の経験がない忠房・兼昌・大進は、この時点での歌歴も浅く、百首詠進に骨を折つたことは容易に想像されよう。『堀河百首』とは異なり歌題が必ずしも一般的ではないものが多く含まれていることも、一層困難にさせたと思われる。

一方、『堀河百首』歌人である仲実と俊頼には言うまでもなくそれぞれ『綺語抄』と『俊頼髓』があり、和歌に関する知識は忠房・兼昌・大進等の比ではない。

また、山田洋嗣氏は、『永久百首』歌人七人について、頭仲・仲実・俊頼はかつての堀河院歌壇に属し互いに親交があり、兼昌も含めて一つのグループを形成し、また、兼昌は源俊輔の子で、頭仲の妻の兄弟にあたり、忠房は頭仲の次男、常陸と大進は、『永久百首』の作者注にそれぞれ「肥後守定成女 本名肥後」「同定成女」とあり頭仲の母の姉妹にあたることを指摘し、『永久百首』の作者がすべて頭仲の一族を中心として構成されている点を指摘している¹⁷⁾。

以上ことから、『永久百首』の「衆議の場」は『堀河百首』

のそのように、「自由な論評、新しい歌の世界の開発への意欲、また一つの実験意識に燃えた芸術的雰囲気」を持つものではなく、「堀河百首」歌人である顕仲・仲実・俊頼・常陸らが一種の先輩歌人となり、彼らに追従しようとする顕仲一族の歌人を指導するといった性格を帯びた「衆議の場」であつた——意図されたものではなく、結果的にそのように機能したと思うが——と想定してみたい。

おわりに

以上、推測に推測を重ねてきたが、本稿では『永久百首』の歌に見られる歌枕詠、特殊な歌語や表現、あるいは類似歌を検討することにより、従来否定されてきた「衆議の場」が『永久百首』においても『堀河百首』と同様存在したと一応の結論を提示しておきたい。そして、その「衆議の場」の性格は『堀河百首』が芸術性を志向していたのとは異なり、経験の浅い歌人に対して指導的に機能したのではないかと考える。規模の面、歌人構成といった面だけでなく、その意味でも確かにこれまでの「堀河院歌壇の残映」という評価も妥当といえよう。しかし、それは「永久百首」が従来いわれてきたような、内部に分裂があり統一に欠けた「個人別の寄せ集め百首」であるというからではない。

猶、追悼百首という位置づけについても再考の必要があると思うが、紙幅も尽きた今他日を期したいと思う。

注

- (1) 『院政期歌壇史の研究』第六章 堀河院歌壇の残映（橋本不美男 昭和四一年二月 武蔵野書院）、『校本永久四年百首和歌とその研究』（以下「校本永久百首」）第一章 III 永久四年百首の詠風と成立（橋本不美男・滝沢貞夫 昭和五三年三月 笠間書院）を参照。
- (2) 「為忠家両度百首について——初度百首から後度百首への展開」上野香織（国語と国文学 67-18 平成二年八月）、「為忠家両度百首」に関する考察——歌作の場の問題を中心に——佐藤明浩 語文 57 平成三年一〇月）など。
- (3) 和歌の引用はすべて『新編国歌大観』に拠る。但し、『永久百首』については『校本永久百首』をも随時参照した。
- (4) 歌枕ではないが、「石」題には「沖の白石」「万劫の石」「千引の石」「佐保の川原の石」「さざれ石」等のように、歌人達が競って様々な石を詠んでいる例も見られる。
- (5) 日本歌学大系所収本に拠る。
- (6) 「家集」とあるが、現存する『散木奇歌集』には見えない。
- (7) 『繪語抄』の下巻末尾に見えるが、現存本からはどういふ部類意識から採録されたのかは不明。
- (8) 『散木奇歌集』六一四番歌の注。引用は日本歌学大系所収本に拠る。
- (9) 『散木奇歌集』一二五六番歌の注。
- (10) 『堀河百首』の成立事情とその一性格——堀河百首研究（一）——竹下 豊（女子大文学国文 36 昭和六〇年三月）に指摘がある。
- (11) 『堀河百首と中世和歌』峯村文人（国語 2-12-4 昭和二八年九月）
- (12) 『校本永久四年百首和歌とその研究』（橋本不美男・滝沢貞夫 昭和五一年三月 笠間書房）第一章 IV 堀河百首の成立時期とその課程
- (13) 注(10) 参照。
- (14) 「堀河百首」とその背景——周辺の歌学書との関連における——

鳥井千佳子（中古文学36 昭和六年三月）

(15) 以下、橋本・滝沢両氏に倣い「衆議の場」という語を用いるが、全員が集まるような会合が定期的に持たれたというのではなく、人数や時間もまちまちであらうし、何かのついでに知識や意見の交換がされたり、消息による質問などもあっただろう。固定的なものではなく、広い意味で歌が詠み出される背景となった「場」というものを考えておく。

(16) 引用は私家集大成（中古一）に拠る。

(17) 注(10)参照。

(18) 「神祇伯顯仲伝の考察」山田洋嗣（日本文学38 昭和五二年七月）

(19) 単純な比較であるが、『永久百首』歌人の勅撰集入集歌数を次に挙げる。

顯仲 二五首／仲美 二三首／俊頼 二一〇首／常陸 五〇首

忠房 五首／兼昌 七首／大進 〇首

右列の『堀河百首』にも出詠した歌人との差は歴然としている。

【大進の和歌】（最初に掲出する歌番号のみを記したものが大進詠）

志賀山越

中空にゆきもやられずおぼつかななすみはれせぬ志賀の山こえ（六三）
みねつづき花に心のとまりつつゆきもやられずしがの山こえ（六二・常陸）

蛙

春ふかみかはづのすだく声すなりゆきてやましましみの山吹（二二六）
くれて行く春ををしとやもろ声にゐでのかはづのすだくなるらん（二二五・常陸）

賀茂祭

年をへてけふかざしくるあふひ草神にたのみをかくるしるしか（二二三）
人よりもたのみぞかくるあふひ草わきても神のしるしみせん（二二二・常陸）

避暑

夏くればふせやが下にやすらひてし水のさとにすみつきぬべし（二七五）

おりたちてし水のさとにすみつればなつをば外にききわたるかな（二七四・常陸）

夏虫

なにごとをいとかくばかり夏虫のおもひあまりて身をこがすらん（二八二）

露のいのちはかなくみゆるなつむしのたれを思ひに身をこがすらん（二八一・常陸）

水鶏

夏の日たそかれ時におぼつかなたたく水鶏の声ばかりして（二二〇）
おぼつかなうはの空にやちぎりけんいづくともなくたくたく水鶏は（二〇九・常陸）

草香

藤ばかりまほふあたりはおひいづる草の香のみなつかしきかな（二九四）

我がそでに草のかうつる秋ののたびねの床はなつかしきかな（二九三・常陸）

柞

うすくくく木木の梢はみゆれども柞の色の身にもしむかな（三〇八）
うすくくくおなじ木ず糸の柞原わきて時雨のふるにや有るらん（三〇七・常陸）

初雪

めもはるにはなかとぞみるしもがれの草木もわかずふる初雪（三三〇）
しもがれの草にやつるる故郷に今朝はつ雪のめづらしきかな（三二九・常陸）

五節

くもりなき豊のあかりにみつるかなあまつ乙女のまひのすがたを（三七一）
日影さすとよのあかりにみつるかな我がすべらぎの千世のかざしを（三七一）

駕着 (三七〇・常陸)

夜とともにおもふことなきをし鳥やかげとならびの池にすむらん (三九九)

みさびるぬかがみの池にすむをしはみづからかげをならべてぞみる (三九八・常陸)

恋ひわぶる人にあふみの海といへどみるめはおひぬ物にぞありける (五二六)

にほの海はみるめもおひぬ浦にてやむべかづきする海人なかりけり (五二五・常陸)

滝 谷川やおちくる滝のしらいとを水のあやに織るにやあるらん(五四〇)

山たかみおちくる滝のしらいとをむすぶしづくに玉ぞこぼるる (五三九・常陸)

古郷 よもぎ分けたづねぞきぬる古郷は花たちはなのかをしるるべにて (五五四)

むぐらはひよもぎがそまとあれはてふりにし里は人かげもせず (五五三・常陸)

寺 法の声入りあひのかねにひびきあひてあはれつきせぬふるき山寺 (五六一)

木の葉ちり鹿なく秋の山寺はいりあひのかねの音ぞさびしき (五六〇・常陸)

小篠 あさまだきをさが原を分けゆけば露けき袖を人やとがめん(五八九)

露しげきをさが原を分けゆけば衣のすそになびくしらす玉 (五八八・常陸)

元服 むらさきのはつもとゆひにむすびおかんつるばみの衣ちとせふるまで

むらさきのはつもとゆひをむすぶより君がくらゐの山をしぞ思ふ (六〇三)

賀 つきもせぬ君がよはひはいくちよとかぎれる竹の杖にやあるらん (六〇二・常陸)

我が君をいはひこめつつ竹の杖ちよとちぎるはうれしかりけり (六一〇)

七夜 つるの子のちとせをふべきはじめとは七日よりこそいはひ初めけれ (六一七)

ちとせふる祝の松のつるの子はけふすをたちて七夜なりけり (六一六・常陸)

仙宮 故郷はいかになりしをのえのくつるもしらす年のへぬれば (六二四)

我もいざたづね入りなんをのえのくちけん山の跡をしひびて (六二三・常陸)

妓女 あげぼのかすみこめたる花よりもあかぬはいもがにほひなりけり (六四五)

からころもたちはなれて朝夕にめかれずみれどあかぬいもかな (六四四・常陸)

老人 くらかみも色かはりゆきみる人のいとふばかりにおいにけるかな (六五二)

とし月のゆきつもるにもくろかみのかはるすがたのはづかしかな (六五一・常陸)

〔付記〕本稿は平成五年七月十七日の和歌文学界例会(於中央大学会館)

での「永久百首の成立の背景について」と題する研究発表に基づいている。

(いくら ふみと)